

松 山 大 学 論 集
第 32 卷 第 3 号 抜 刷
2 0 2 0 年 8 月 発 行

夏目漱石と『別冊太陽』二人の執筆者

菅 紀 子

夏目漱石と『別冊太陽』二人の執筆者

菅 紀 子

1. は じ め に

『太陽』は近代日本において総合雑誌の草分け的存在であるが、この雑誌に英語版が存在した時期があった。英語版は『別冊太陽』という。本稿は筆者が作家以前の夏目漱石（金之助）の就職活動のライバルとされる重見周吉の調査研究を続けるうち、『別冊太陽』に重見の記事を発見したことを端緒とする。

ここでは『別冊太陽』において重見と隣合って記事を掲載しているのが神田乃武であることに注目した。一方漱石研究の領域においては、神田の名は登場するものの両者の関係についてはあまり探求されていない。

そこで論を進めるにあたり、はじめに『太陽』と『別冊太陽』について紹介し、次に重見、神田、夏目三者の関係を探る。その方法として、先に重見周吉の略歴と夏目との関わりを簡単に紹介した後神田乃武の経歴を確認する。次に重見の調査結果を踏まえて「神田と重見」との関係を探り、さらに「神田と夏目」との関係を探る。最後に「重見と夏目」との関係を重見の学習院採用と夏目の不採用に還元し、神田の存在が両者に与えた影響の可能性を考察する。

2. 『太陽』について

2.1. 誕生と発展

『太陽』は1885（明治18）年1月号から1928（昭和3）年2月号まで、33年間続いた博文館発行の総合雑誌である。本誌は明治期における思想、文化の動きを知るうえで重要なメディアであった。その発行部数は通常号445冊に増

刊号 86 冊を加え、通巻 531 冊におよぶ。1 号平均では 98,537 部である。

博文館は、1894（明治 27）年 8 月『日清戦争実機』が大当たりすると従来からの雑誌を一切廃止し、『太陽』に統合した。日清戦争に始まる近代日本の帝国主義政策が本誌の話題や売上げを左右するものであることが窺われる。

2.2. 『別冊太陽』

明治初期に次ぐ明治 20 年代前後に 2 度目の「英語熱」が起こる。これを反映して 1895（明治 28）年、『太陽』に英文欄が設けられた。これが『別冊太陽』である。そのコンセプトは①英語学習の意欲に応える、②海外市場を誇る姿勢を保つ（例えば広告欄にて）、③日清戦争後の国家意識の高揚と対外「膨張」主義を反映するものであった¹⁾。

体裁を見ると、おもて表紙は日本語の誌名の上に英文タイトルを冠し、裏は英文表紙となっている。目次には掲載記事のタイトルの英訳があり、「英文欄」を開くと本文が開始する。このような体裁は現在の学術雑誌や大学紀要でとられる形式であり、『太陽』がそれらの発端を創ったという見方もあるという。

さらにその後の発行状況を見ると、『別冊太陽』そのものは 1896（明治 29）年第 2 巻で廃止となっている。以後本誌の英文表記に関しては目次のみとなり、1900（明治 33）年第 6 巻より要目概要「SUMMARY」をつけ、1904（明治 37）年第 10 巻より「THE SUN TRADE JOURNAL」として拡大した。英文欄が僅か 1 年で廃止となった理由は、単純に売れなくなったからだという。

『別冊太陽』第 1 巻は主として（下線筆者）神田乃武が執筆しており、1 巻 1 号から 12 号まで 136 篇の記事が掲載されている。記事テーマの国別内訳は日本：52、中国：51、朝鮮：21、英国：3、米国：3、ロシア、フランス、ハワイが各 1、その他が 3 で日清戦争を反映していることがわかる。（小田 1998）

2.3. 『別冊太陽』に存在した重見周吉の英文記事

重見周吉の記事は1895（明治28）年8月5日、第1巻第8号にある。

第1巻第8号誌面（資料1）をみると、表紙からは発刊への意気込みが感じられる。本文の後総目次における重見の記事タイトルは次のように日本語、英語併記となっている。

The SUN.

A JAPANESE CALLER.（＊啞の来客米国新着日本学生の失策譚）

（別一一四）



資料1 『太陽』1895（明治28）年8月5日、第1巻第8号表紙

内容については本稿のテーマに対して関連度は薄いと判断したので本稿では要約にとどめることとする。概要は次のとおりである。

重見周吉が留学しているイエール大学のある米国コネチカット州ニューヘイヴンに日本人留学生が到着した。記事はその留学生が到着早々米国人の自宅に招かれ訪問した時の様子を重見が観察し描写したものである。その日本人は世話を施してくれる米国人の家に来たものの、殆ど英語が話せないため口を開くことができない。主の夫人が簡単な話掛けをするが返答することもできず沈黙が続く。気まずい雰囲気の中時計の針ばかりが進んでゆき、ついにはその「新着日本学生」は一言も発言することなくその家を去る。

留学生をして「啞」と譬え、その字が表題に使われている点に筆者は違和感を覚えた。現在ならば差別用語である。しかし当時そのような社会倫理はなかったので重見はこの顛末をユーモアを交えて描写する目的でこの語を用いたのであろうと解釈した。

さて2.2.の下線部「主として」(小田)は表現が曖昧である。主でない執筆者は重見以外に存在したのだろうか。調査の結果、実は重見が『別冊太陽』に執筆したのは前述した第1巻第8号の一本のみであり、それ以外の記事は全て神田乃武単独の執筆であることが判明した。一雑誌の英語版執筆者バランスにおいていびつである。なお、唯一の重見の記事は、神田乃武の記事に先立ち先頭に置かれていた。(資料2)

もう一段階視野を広げ1895(明治28)年7月5日第1巻第7号を参照すると、別冊には1ページから8ページまで全13本の記事がある。その著者が全て神田乃武なのである。残り全ての記事に神田乃武の氏名が羅列されている目次は一種異様な眺めである。(資料3)

つまり『別冊太陽』の執筆は重見の1本の記事を例外として神田乃武一人の

3. 重見周吉について

3.1. 略歴と夏目との関わり

重見周吉は1865（慶応元）年愛媛県今治に生まれ、同志社英学校を経て米国イエール大学に私費留学し、医学博士号を取得して帰国した。重見は帰国直後1891（明治24）年より3年間慈恵会医学校で教鞭を執るとともに、1893（明治26）年学習院に採用され、10年間奉職した。学習院教授職をめぐり同時に応募していたのが夏目金之助（後の漱石）で、夏目は就職活動における「敵」としての重見をライバル視していた。結果はまさかの不採用であった。20年後、夏目はわざわざこの不名誉を当の現場で公表する。夏目は不採用となった学習院の同窓会である輔仁会からの依頼を受け、学習院の現役生を前に講演を行った。夏目が晩年この講演録を作品化したのが『私の個人主義』である。同小品には夏目の学習院への就職活動の経緯が書かれ、採用が決まった気になり教壇に立つためのモーニングまで誂えたエピソードまで添えている。しかし、なぜ夏目が学習院教授職に不採用となり「其人はなんという名でしたか今は忘れて仕舞ひ」「その米国帰りの人」、即ち重見が採用されたのか。その具体的根拠は未だ釈然としないままであった²⁾。重見は慈恵会医学校と学習院で教鞭を執る傍ら日本橋に重見医院を開業し開業医として生涯を送った。また重見は関東大震災で被災し、一時横浜に避難するが³⁾、再び日本橋に戻り、1928（昭和3）年病を得て没した。

3.2. 『別冊太陽』発見のきっかけ

筆者は重見がイエール大学医学部生時代米国で出版した英文著書『日本少年』（*A Japanese Boy by Himself* 1889）邦訳³⁾を出版後、重見周吉に関する総合報告として2017年に松山市坂の上の雲ミュージアムにて、2018年に今治市立中央図書館にて展覧会を開催した⁴⁾。両展開催にあたり、既に調査済み資料の再確認と更新を関係機関で実施したところ、国立国会図書館にて総合誌『太陽』⁵⁾に

英文欄『別冊太陽』の一時的な発刊を知り、そこに重見の記事が存在することを発見した。さらに重見の記事の隣には神田乃武が記事を掲載していることがわかった。『別冊太陽』がなければ夏目の重見と神田との繋がりは見出しえなかったゆえ経緯を記録しておく。

4. 神田乃武について

4.1. 生立ち

神田乃武は1857（安政4）年2月27日、能楽師かつ幕臣松井永世の次男として誕生した。1868（明治元）年、神田孝平（1830～1898）の養子となる。養父の孝平は漢学から蘭学に転じた人物である。当時の日本の語学教育に関する変遷を確認すると、江戸幕府は開国後洋学の必要から「洋学所」を開設するが、それが名を改め「蕃書調所」と称される。孝平はそこの教授となった。蕃書調所では蘭学、英学、翻訳、外交折衝なども手がけ、語学教育を推進した。続いて時代に合わせ名称はさらに「洋書調所」を経て「開成所」と変わる。孝平はその開成所にて日本で初めて西洋数学を教えた。神田姓に変わった乃武は10歳で開成所において養父からアルファベットを学んだ。その後養父の赴任先である京都へ同行、孝平が東京へ戻った後もそのまま関西にとどまり大阪で緒方洪庵の蘭学塾に学んだ。孝平はさらに初代兵庫県令（現在の知事にあたる）その他を経て貴族院議員となり、逝去を機に男爵の称号を与えられた。したがって実質的には子息である乃武が男爵の称号を得たといえる。

（以下文中の傍線は筆者による）

4.2. 米国留学

神田乃武は二度留学した。第1回目は米国留学で第2回目は独仏留学である⁹⁾。ここでは米国留学について述べる。神田は1871（明治4）年2月から1879（明治12）年12月まで、数え年14歳から22歳まで8年10か月在米し、その間直接また間接的に森有礼の庇護を受けた。これは養父孝平が森の思想に共鳴

し、息子乃武の米国留学を決意したことによる。そのような経緯から乃武は1871年森の中米便利講師としてのワシントン赴任と同時に使節団一行37名の中に加わり渡米、かつ留学生となった。その時森有礼は22歳で、神田乃武は最年少の14歳であった。森は乃武を米国人の中に住ませ、養父孝平は乃武に毎日英語で日記をつけるように命令した。

神田乃武は渡米した年約6か月間ニュージャージー州ミルストウンの牧師、E. T. Corwin 宅に滞在した後マサチューセッツ州アマーストへ移り、デイビス (Davis) 夫人宅に滞在し1871年8月から1879(明治12)年まで9年間勉学に勤しんだ。そのうち4年間のアマースト高校 (Amherst High school) 在校を経てアマースト大学 (Amherst College) へ進学、4年後1879年に学士号を取得した。さらに1888(明治21)年修士号、1921(大正10)年に名誉法学博士号を取得する。

長期留学も終わりに差し掛かった1877(明治10)年、神田はボストンの近代語学校 (The School of Modern Languages) のソーヴェール博士 (Dr. M. Sauveur) の唱える「自然教育法」(natural method) に出会い大きく心を動かされた。さらに、ソーヴェール自らアマースト大学に赴きサマースクールを開講すると、神田はこれに参加し自然教育法に一層心酔したという⁷⁾。神田はこのメソッドで「会話による教授法」(teaching by conversation) を学んだ。これが神田の英学における方向性を決定づけたといえる。

なぜなら神田は帰国後「会話による教授法」を正則法と呼び、長期に亘りその普及に努めたからである。ソーヴェールはフランス人で、自然教育法は原語で method naturelle である。彼女の提唱までヨーロッパにおける言語教育法は文法に則して解釈していく文法訳読法であった。歴史の浅い米国でも欧州の流れを汲んでいたであろう。日本においては外国語である漢文を読解するのに同様の訳読式言語教授法を用いており、その例に洩れていない。神田は従来漢籍の習得に用いてきた文法訳読法を「変則法」と呼び、区別した。

後世の評価によると、正則法という方法論を打ち立てたことに対し、神田乃

武は井上十吉、斎藤秀三郎とともに、明治日本の3大英学者とされている⁸⁾。

4.3. 米国留学から帰国後

留学を終え帰国した神田乃武は1880（明治13）年東京大学予備門の講師（英語、史学）、共立学校（英語）、東京大学講師（英語）、第一高等中学校教諭、東京大学の文科大学教授（ラテン語、ギリシャ語）、東京高等女学校教諭などを歴任した。

1889（明治22）年、元良勇次郎、外山正一と共に英語圏の教養教育（liberal education）を目指して芝公園内に正則予備校を創立する。そこでは翌1890（明治23）年から1923（大正12）年逝去するまで32年間二代目校長を務めた。1893（明治26）年高等商業学校教授、文科大学では講師として1900年までラテン語教授、1899（明治32）年東京外国語学校（東京外国語大学の前身）初代校長、そして1902（明治35）年学習院（学習院大学の前身）教授となり、高等商業学校（一橋大学の前身）教授を兼務しつつ1911（明治44）年依願退職までの9年間に学習院英文科の主任、または科長として学習院のために尽くした。

次に、留学中の神田乃武の経歴のうち下線部に注目して重見周吉と比較する。

5. 重見周吉と神田乃武

5.1. 同志社英学校

1865（慶応元）年生まれの重見周吉は、1857（安政4）年生まれで神田乃武より8歳年下である。14歳で故郷の愛媛県今治から開校初期の同志社英学校へ進学した。そして1882（明治15）年4月9日、同志社教会入会と同時に受洗している。同志社の創立者新島襄は、明治維新後四国で初めてのキリスト教会の設立の地として今治を選んだ。今治教会の初代牧師は横井時雄（熊本の儒学者横井小楠の息子で後に養子縁組で改名し伊勢時雄と名乗る）である。横井は同志社英学校の第一期を首席で卒業し、今治に赴任した。そして新島襄の妻

八重の姪であり山本覚馬の次女である山本みねと結婚した。横井は熊本バンドの一員として集団で同志社英学校に移ったが、その中のメンバーでもあった徳富蘆花は横井と従兄弟にあたる。

当時蘆花は兄の蘇峰と兄弟仲が悪く、その後不和が長く続いたのは周知の逸話である。徳富兄弟の母はその様子を見て蘆花を従兄弟の横井時雄のところへ行くことを薦めたこともあり、蘆花は横井今治教会初代牧師を頼って今治を訪れ、滞在している⁹⁾。今治教会には重見の両親、重見茂平とシゲ、そして重見の長兄の妻である兄嫁重見チカの名前が残っている¹⁰⁾ ことを確認した。重見の両親は浜で仏壇を焼くほどの覚悟をしてキリスト教に改宗したのである。その頃周吉はまだ幼い少年にすぎず本人が今治教会に出入りした記録は確認できていないが、重見の留学実現への最初の踏み台は今治教会を設立した新島襄によると言えるであろう。

では資金も伝手もない重見はどのようにしてイエール大学を知り目指したのだろうか。熊本バンド出身の同志社英学校上級生にイエール大学へ留学した者が複数いることを確認した¹¹⁾。

重見は以上のような今治（教会）、京都（同志社）、熊本（バンド）を繋ぐ、環境からイエール大学を意識し、留学先として選択したと考えられる。

さらに、外務省外交史料館における調査で重見の渡航記録を発見した際、重見が記載されたマイクロフィルムの隣り合ったページに新島襄の渡航記録をも認めた。それによると重見周吉は渡航時18年9か月（18歳）、出身は愛媛県平民で、目的は学術修行のため、目的地は米国ニューヘブン（記録通りの表記）で、7月に渡航している。新島襄は渡航時42年2か月（42歳）京都府平民、目的は学術研究、目的地は米国波士頓（ワシントン）で同年4月4日に渡航していた。両者の渡航日は3ヶ月違いでかなり近い上に、渡航先は重見が米国コネチカット州ニューヘブン、新島はワシントンでいずれも東海岸の隣接地域である。二人が連れ立って渡米した形跡はない。

しかし、重見の留学中、イエール大学の当時の学長 Noah Porter から新島へ

宛てた書簡が見つかった¹²⁾。その中で Porter 学長は無一文でイエール大学に在籍する重見について案じ、日本へ送り返した方が良いのではと綴っていたのである。この書簡は、新島が重見と同地にいたくとも重見のことを把握しており、重見の留学先であるイエール大学の学長と親交を持ち友人関係にあった事実を裏付ける。重見は、日米の学長間で一私費留学生の身を案じられた当事者だったのである。

神田は先述のとおり、新島と同じマサチューセッツ州アマースト大学に留学し修士号まで取得しているが、同地で 1871～79 年まで 9 年間デビス夫人宅に下宿していた。一方重見の学習院応募履歴書¹³⁾によると、重見は明治 15 年 9 月以降「デビス諸氏ニ就テ英學ヲ修ム」という記載がある。神田が下宿したのはデビスの自宅で、主人デビスの留守宅を守る夫人に世話になっている。アマースト大学は新島の出身大学でもあり、神田の下宿期間と重見の同志社英学校に在校していた期間は重なる。デビス／デビスを同一人物と見做すと、神田は新島が社主を務める同志社英学校で教鞭を取ってもらっている米国人の自宅に下宿し、重見は新島の学校でその米国人から直接英語の指導を受けたという三者の繋がりが炙り出される。

5.2. 学習院

学習院アーカイブズに保存されている重見の学習院応募時の履歴原書には、教師デビスの個人名を記したにも関わらず、同志社という学校名が記載されていない。これは、学習院が当時神道に根ざした皇族が学ぶ官制学校であったことに配慮して、当時の配慮として異教であるキリスト教学校の名を出すことを控えたものと推察される。この履歴書を含む採用人事において夏目と重見が教授職の座を争い、重見が採用された。夏目の方は、『私の個人主義』に文科大学卒業直後であるが大学の先達など確かに引いてくれる人脈もあるゆえに、まず確かだろうとモーニングを誂えたエピソードまで書き残した。夏目の人脈に勝る重見の人脈と採用側の判断がなければこのような結果にはならな

かった筈である。

学習院辞令簿¹⁴⁾によると、重見は1893（明治26）年7月7日の奉職以来更新を続け、1905（明治38）年9月28日非職満期を迎えるまで12年間教授を務めている。これに対し神田の奉職期間を見ると、1902（明治35）年教授職に就任し1911（明治44）年依願退職するまで9年間英文科の主任または科長を務めた。換言すると神田は年下の重見より9年遅く学習院の職に就き、3年間は同時に在職していたのである。ただし偶然か否か、辞令簿は神田が学習院に就任した1902年9月29日、重見は非職の命を受けており、3年後1905年9月28日に非職満期を記している。つまり神田は重見と入れ替わるように学習院の座を得ている。ならばこの時期学習院人事において神田と重見の間に何らかの関わりがあったのか。筆者の推測の域を出ないが、ひとつには重見の履歴書の名前に「平民」と添えてあるのに対し、神田は養父孝平から継いだ「男爵」であることが想起された。学習院は当時官制で皇室の子息が通う学校であったことなど身分社会の指向性も含まれるかとも考えられる。

また、重見は在職中4度学習院の同窓会組織である輔仁会の機関誌『輔仁会雑誌』に寄稿している。夏目漱石は、晩年同じ輔仁会の依頼を受けて学習院で講演をし、四半世紀前の自身の不採用の顛末を現役生徒の前で告白するという因縁を持つこととなる。不採用の20年後、漱石は47歳、没する2年前のことであった。

5.3. 慈恵会医学校

重見はイエール大学医学部で博士号を取得し帰国すると直ちに創立間もない慈恵会医学校（現在の東京慈恵会医科大学の前身）の教師に就任していた。当時はドイツ医学が主流であったが、慈恵会の創立者高木兼寛は英国に留学し英国医学を取り入れた。ドイツ医学の場合使用言語はドイツ語であったのに対し、英国医学では英語を使用したので米国の医学博士号を取得した重見が採用されたことは理に叶う。（菅 2003）

2017年10月、重見の出身地愛媛にて展覧会を開催するにあたり、既に調査済みの資料を再確認するため慈恵会医学校の後身である東京慈恵会医科大学を訪問し、医学情報センターに調査を依頼した。その結果、同センターのご協力により新たに写真を発見することができた。しかも、それまで確認していたのはイエール大学同窓会に保存されている上半身の写真のみであったが、ここで初めて全身写真が見出された。これは明治24年卒業生の集合写真¹⁵⁾で、前列中央に高木兼寛が座を占め、両側に教授陣が並んでいる。重見は右端にいるが、その他の教授陣と比べて破格に若い。帰国直後の27歳の教授である。

英国医学に基づく英語使用以外に、若年の重見が慈恵会医学校に採用された背景はほかになかったのだろうか。ここで神田乃武の人脈調査を進めるうち、また次のような新たな繋がりの可能性を発見した。

神田の妻熊千代は佐賀士族高木秀臣の長女である。次男高木八尺（やさか）は東京大学法学部名誉教授となった。この高木姓は妻の旧姓に関わるものだろうが、次女百合は妻の旧姓とは別の高木姓である高木兼二（1881（明治14）～1919（大正8））の妻となる。高木兼二は高木兼寛の次男で、父兼寛が創立した慈恵会の内科主任を経て教授を兼ね39歳で没した人物である。神田と慈恵会医学校創立者の高木兼寛とが縁戚関係にあったことで、重見が学習院に先立って慈恵会医学校に職を得る道が繋がったとすれば、同様にその人脈で『別冊太陽』に神田と重見の並ぶ記事が成立したとしても無理はない。

5.4. 『日本少年』の描写から

神田がアマースト大学を修了して帰国し東京芝に正則予備校を設立した1889（明治22）年、重見周吉はイエール大学医学部に進学し、学費と生活費の調達のため同大学の地元コネチカット州ニューヘイヴンのシェルドン（Sheldon）社から英文著書『日本少年』を出版した。本書は翌1890年ニューヨーク州ヘンリーホルト（Henry Holt）社という別の出版社から重版が出るほど売れ行きが良く、それによって私費留学の重見が医学部を継続し卒業すると

いう目的は叶えられたのである。

本書は、重見が留学先のイエール大学のあるニューヘイヴンにて、日本の生活、文化、風土など故郷今治で少年時代を過ごした思い出を記憶のみを頼りに記した自伝的エッセイである。当時日本事情を知る術のなかった米国人にとって、本書は好奇心をそそる面白い読物となった。また、重見は自著『日本少年』の執筆方針として、個人的ではなく、なるべく普通の日本人の少年が見聞したことを客観的に描写するよう努めたと断っているが、それでもところどころ著者の本音や感慨が吐露されていると感じられる部分があった。そのような部分の一箇所から神田の主張との比較を試みる。

神田乃武が正則予備校を開校したのは、留学中「自然教育法」(method naturelle)に感銘したからで、「会話による教授法」(teaching by conversation)を正則法と名付け実践するためであり、従来の文法訳読式言語教授法を「変則法」と呼んだことは先述のとおりである。これに対し、『日本少年』の本文中に類似の話題で言及したものがある。指摘箇所を拙訳で紹介する。

第4章 遊び－新しい学校－西洋の模倣－先生についてもう少し－学校での罰（以下指摘部分のみ抜粋）

学校時代も終わりに近くなった頃、政府は教育の大改革を行い、西洋の一般学校制度を採用した。（中略）

僕が渡米しようとしていた矢先、兄はこれが学校で使われているものだと言って東京の学者が著した二冊の薄い日本語文法を僕に渡してくれた。僕はその二冊をいまだに持っているが、個人的にはその試みが成功したとはあまり思っていない。その学者はヨーロッパの文法学者のやり方に倣うよう努め、“名詞”と“代名詞”，“動詞”と“副詞”，“冠詞”さえも混在した文の中から賢く見分けた。（中略）大体においてその本は、僕を啓発してくれるというより混乱させる結果となった。だから、言語をちょっと

かじってみた後になって僕が思うのは、日本語については、赤ん坊が教わるようにするほうがよいということだ¹⁶⁾

当該抜粋部分は客観描写ではなく、重見自身の言語学習経験を踏まえて書かれている。それは文法訳読法で言語習得の主流であり日本の文部省もそれに倣った。重見は自身が英語を習得してみて、本文では話題上「日本語については」と断わっているとはいえ「赤ん坊が教わるようにするほうがよい」という。つまり重見の感慨は、換言すれば言語は自然に習得するほうがよい、と取ることができ、神田の感銘した自然教育法、神田の名付けた会話による教授法である正則法と考えが一致しているといえる。

先述の通り、神田の東京芝における正則予備校開校は1889（明治22）年で、重見の北米コネチカット州ニューヘイヴンにおける『日本少年』出版と奇しくも同年である。

加えて、自然教育法に関連して次のような事実と提起がある。松村幹男は3.2.で紹介したM. SauveurはL. Sauveurではないかとする指摘¹⁷⁾を取り上げ、M. Sauveurとしたのは上田辰之助であるが、L. Sauveurが正しいとすればLambert Sauveurではないかとする。なぜならばLambert Sauveurはもう一人のnatural methodの実践家Gottlieb Henessと共に1866年、New Havenに私立の現代語学校を設立した人だからである¹⁸⁾すると重見もニューヘイヴンで自然教育法を知った可能性があり『日本少年』の当該言説部分は整合性を帯びる。

6. 神田乃武と夏目金之助

6.1. 帝国大学文科大学

神田乃武と夏目金之助は師弟関係にあった時期がある。1893（明治26）年7月、帝国大学文科大学第2期生としてただ一人卒業すると大学院に入学した。そこで神田乃武に「英国小説一般」の指導を受けた¹⁹⁾

実は夏目は1884（明治17）年東京大学予備門に入学した（この時点では塩

原金之助) 時には立花銑三郎と同期であったが、腹膜炎を起こして落第し一年遅れた。1889(明治22)年一足先に帝国大学文科大学哲学科に入学した立花は、学生的身分で学習院講師、東京専門学校講師を兼ねていた。そして夏目より一年早く卒業して大学院に入る一方、学習院嘱託教授となっていた。そこで夏目は学習院応募に際して立花に書簡を送り「此際断然決意の上学習院の方へ出講致し度因て御迷惑ながら御周旋被下度」(1893(明治26)年7月12日付立花銑三郎宛)という依頼をしていたのである。またこの書簡で帝国大学英文学科選科出身の学習院教授村田祐治(1892(明治25)年9月から1895(明治28)年11月まで奉職)にも周旋を依頼していた。

しかし結果夏目は不採用と決まる。すると村田はそれを狩野享吉に報告するとともに、栃木県塩原の上会津屋で湯治をしていた立花銑三郎に「ナツメノコトスグカイレ」と電報を打った²⁰⁾。後年立花は夏目より一年早くドイツとイギリスに留学し、遅れてロンドン留学してきた夏目と現地で書簡を交わしている。立花は1901(明治34)年体調を崩し、治癒の兆しが見えないため帰国船に乗る。夏目とは船がロンドンに寄港した際再会したのが最後となり、後に船上で没した²¹⁾。

夏目がロンドン留学中に接触のあった文科大学時代の友人がもう一人いる。岡倉由三郎である。岡倉は十代で既に共立学校(開成中学の前身)にて神田乃武に英学を学んでいる。1890(明治23)年9月、帝大撰科修了と入れ替わりに夏目が文科大学に入学するが、1893年(明治26)年頃、夏目ら文学科の現役学生と卒業生が文学談話会を作る。この会は毎月研究発表をした後食事をして語り合うもので卒業生の中に岡倉由三郎もいた。岡倉はロンドンでは数回夏目を訪問し、夏目も自転車で岡倉の下宿を訪問するくらいの距離にいた。また何者かが「夏目狂セリ」と文部省に伝えたため夏目を保護して帰朝するように依頼されたのも岡倉である²²⁾。夏目とこのような交流関係のある岡倉は『日本人の欧文学』のなかで、重見の『日本少年』を紹介している²³⁾。以下にその部分の本文を抜粋する。

(一) 一八八九年(明治二二)重見新吉(ママ)といふ人が“A Japanese Boy, by Himself”と題する百二十餘頁の小冊子をニューヘイヴンから出して居る。氏は四國今治の人、エール大學に學んだ人らしいが、當時米國に日本少年を紹介した著述が無いので、此の欠陥を充さんと企て、一つには著述を以て學資の一助としようとしたのだといふ。中型紫色の表紙に漢字で『日本少年』と現はし、内容は日本児童の生活の物語で、少年らしい記述、極めて平易な行文で、其まゝ我が中學生の讀物に適するものである。

岩波講座 世界文学 『日本人の欧文文学』岡倉由三郎 岩波書店(昭和8年)第八 其後英米に於ける邦人 二、米國 51頁

学生時代に続き留学先でも友人関係にある岡倉の重見への言及は夏目にも伝わっている可能性が高いと考えられる。したがって『私の個人主義』において記した「米国帰り」の「敵」の名を「忘れてしまった」というのが真実かどうかはともかく、逆に重見を非常に意識しており一種とぼけているのかもしれない。

次に、夏目にかかわりのあった周辺人物からみた夏目と神田との接点はないか、『夏目漱石周辺人物事典』に神田に関する記述を探った。すると、神田は先に言及した立花銑三郎と岡倉由三郎のほかに、清水彦三郎、立花政樹、大塚保治、奥太一郎の項に言及されているものの、神田乃武自身の項目は設けられていなかった。上記の各人の項の情報から、奥以外は当人達の学生時代に関わった人物であることがわかる。神田はこれらの人物のため就職の便宜を図り、大塚保治にいたっては夏目と共に二人を楠緒子の結婚相手として周旋したという。夏目の周辺人物から拾った神田の人物像については教え子らに対し極めて面倒見の良い指導教授という側面が垣間見られた。

6.2. 夏目の神田宛書簡

夏目は学習院を不採用になった後、英字新聞『ジャパン・メール』へも応募するがこれも不採用となる。社会に出た矢先の若き夏目の英語をめぐる最初の相次ぐ挫折である。この頃既に「神経衰弱」の兆候もあり、鎌倉の円覚寺に参禅するなど精神の不安定を拭う試みもするが悟りを開くことはできなかった。そして翌年唐突に四国の松山中学へ赴任する。

松山城の麓、松山藩最後の城主久松家の純欧風別荘「萬翠荘」²⁴⁾へ向かう上り口に、夏目が松山へ到着直後したための報告と挨拶の書簡が全文石碑に刻まれている(資料4)。その宛先は神田乃武なのである。それはなぜか。着任の報告挨拶を送る人物はほかにもいたであろう。加えて神田の名は夏目の学習院



資料4 夏目の神田乃武宛書簡石碑(奥)と翻刻(手前)
夏目金之助の松山最初の下宿愛松亭跡地に建立

応募の顛末に交わされた夏目やその周辺人物間の書簡等には登場していない。また、松山市が神田宛の書簡を石碑に全文刻む対象として選択した意図は不明である。文面を検証すると、夏目は東京を発つ際神田とやりとりがあったことがわかる。そして、松山中学に着任早々4人もの教師が更迭された。更迭された中には神田となんらかの関係を持つ石川氏という教師がいた。書簡には神田が石川氏への伝言を夏目に託した旨が書かれている。であるならばこの書簡の目的は、まず「神田が夏目に託した松山中学教師の石川氏への伝言を直接伝える」という使命を、夏目が果たしたことを知らせる報告にあり、師への儀礼的な赴任報告のみにとどまるものではないと考えられる。即ち本書簡は、夏目が出京直前に神田と接触があったことを示す²⁵⁾

以下に刻まれた書簡全文を示す。

拝呈出立の節は色々御厚意を蒙り奉万謝候 私事去る七日十一時発九日午後二時頃当地着仕候間乍憚御安意被下度候赴任後序を以て石川一男氏に面会致し早速貴意申述置候間左様御承知被下度候同君事ハ今回石川県に新設の中学校へ更任相成明日当地出発の筈に御座候小生就任来既に四名の教師は更迭と相成石川君も其一人に御座候何事も知らずに参りたる小生には余程奇体に思はれ候 教授後未だ一週間に過ぎず候へども地方の中学の有様杯は東京に在って考ふる如き淡泊のものには無之小生如きハーミットの人間は大に困却致す事も可有之と存候くだらぬ事に時を費やし思ふ様に勉強も出来ず且又過日御話の洋行費貯蓄の実行も出来ぬ様になりはせぬかと竊かに心配致居候先ハ右御報まで余ハ後便に譲り申候時下花紅柳緑の候謹んで師の健康を祈り申候

頓首

四月十六日

金之助

神田先生

座右

(封筒表)

東京麹町区飯田丁

神田乃武様

親展

(封筒裏)

愛媛県松山市一番町

愛松亭にて

夏目金之助

四月十六日

7. お わ り に

本稿は、学習院採用を巡る「夏目と重見」の関係を踏まえ、未だ払拭できない疑問を前提に考察を開始した。その過程で『別冊太陽』に重見周吉の記事を発見し、共に執筆している人物が神田乃武であることに気づいた。これにより、あらためて「神田と重見」、「神田と夏目」の関係分析を経て「夏目と重見」の関係に回帰するに至った。さらに、現在愛媛県が石碑に仕立てている夏目の松山赴任を知らせる書簡の宛先が神田乃武であった、ということを再発見することができた。

当時日本の思想界を牽引した総合誌『太陽』の後部に続く体裁で存在した英文版『別冊太陽』には、重見の記事が先頭に配置されており、以後全ての記事が神田のものであるとともに、隣接の号は全て神田の記事であった。『別冊太陽』を編集総括したのは神田で、神田が重見に記事を依頼し先頭に配置したと考えられ、神田の重見に対する信頼が認められる。

神田と重見は前後して米国東海岸ニューイングランドの隣接した地域に留学し、共に高い語学力を習得し帰国すると東京で語学教師として活躍した。その教授法については、従来の「文法訳読法」に対し会話から自然に学ぶ「正則法」を打立てた神田に、重見も自著の中で賛成する意思を示している。また、帰国後重見が教授を務めた慈恵会医学校は創立者高木兼寛と神田の親族に縁戚関係があることがわかり、人脈の繋がる可能性が示唆された。

夏目と重見との学習院における教授職採用人事については、先に学習院で教

えていた立花銑三郎や村田祐治ら強力な人脈があったにもかかわらず重見が採用された。また、夏目には立花や文学談話会で共に研究しあった岡倉由三郎とは自身の英国留学中にも交流があり、岡倉には重見の著書への言及もある。よって夏目も重見を認識していたと推察される。

そして夏目は学習院を不採用となった翌年松山中学へ赴任するが、到着直後、神田宛に丁寧な書簡を送った。

今回の分析で明らかにしたのは、明治の日本において英学を充実させるという目的の下、神田は重見と夏目両者にそれぞれ指導的立場にあり、重見には執筆の場と職場を周旋し、夏目には大学院修了後もその進路を見守っていたことである。その過程で夏目と重見は学習院という交差点でニアミスを経験する。

二者ずつの関係でみると、三者は無縁のように見えるかもしれない。しかしここに至って三者の相互関係が透視できるのではないだろうか。すなわち、神田は『別冊太陽』に執筆を斡旋するほど重見の英語力を買っていた。その頃学習院教授職の募集があり、文科大学卒業直後の夏目は所謂新卒採用人事でまさかの不採用となり重見が学習院に採用される。誰が最終判断を下したのかは突き止めることができなかったが。翌年夏目は松山中学に赴任し到着直後に文科大学の恩師である神田に、赴任の報告と、神田から依頼されたい赴任地の教員人事の結果を報告する書簡を送っているのである。それゆえ単なる恩師への挨拶状にしては文面が長い。

最後に確認のため抽出した出来事を編年式に列記する。夏目は1890（明治23）年9月、帝国大学文科大学英文科大学に入学。在学中神田の教えを受ける。卒業は1893（明治26）年7月、学習院就職の失敗が同年8月である。1895（明治28）年1月、『別冊太陽』が発刊する。（同年同月、夏目は英字新聞「ジャパン・メール」も不採用となった。）その3か月後の1895（明治28）年4月10日、松山中学（愛媛県尋常中学校）の辞令が発令され夏目は赴任。その6日後の4月16日、夏目は松山から文科大学時代の恩師神田宛に報告と礼の書簡を送る。重見の記事が掲載された『別冊太陽』1巻8号は同1895（明治28）

年8月1日付である。神田が重見に執筆依頼をしたのは発刊日より1～2か月は遡るとすると、夏目の松山赴任と神田への書簡が送られた時期に近いのである。夏目と重見との間に面識はないが、少なくとも夏目は重見を認識していた。三者間でなんらかの力学、踏み込んでいえば神田の采配が働いたと想定し得るのではないか。

この時点で、神田と重見と夏目は三者共日本の英学の推進を担う存在であった。しかしその後三者はベクトルを異にする。神田は英学、英語教育を極めるが、夏目と重見は英語教育の場から去り、重見は医療へ、夏目は文学へと土俵を移したのである。

蛇足ながら、夏目は神田に送った書簡に書いた松山中学教員人事の顛末を、自身の初の中編小説『坊っちゃん』の中に盛り込むことも忘れなかった。

註

- 1) 「共同研究報告『太陽』英文欄：英学者としての神田乃武を巡って」小田三千子 国際日本文化研究センター紀要 1998 年
- 2) 『『日本少年』重見周吉の世界』創風社出版 2003 年 164-169 頁 「敵」「落第」「其人はなんという名でしたか今は忘れて仕舞ひました」「その米国帰りの人」は『私の個人主義』本文に使用された語
- 3) 『『日本少年』重見周吉の世界』創風社出版 2003 年、『『日本少年』少年少女版』創風社出版 2012 年
- 4) 「松山市 子規・漱石生誕 150 年プロジェクト 二つの展覧会実施報告」2. 松山大学論集第 30 巻第 1 号 368 頁, 「『日本少年』重見周吉の世界展」松山大学論集第 30 巻第 1 号 370-371 頁, および「『日本少年』重見周吉の世界今治展の開催」日本英学史学会報 No. 147 2019 年 6 頁
- 5) 太陽総目次 ©日本近代文学館／©八木書店 国立国会図書館
- 6) 第二回目は 1900 (明治 33) 年, 文部省の第 2 回留学の命で神田は英語教育視察に専念する。同時に教え子である夏目金之助も命を受け英国留学した。この時には夏目は英語教育への関心を喪失している。
- 7) Kanda Memorial Committee (ed.), *Memorial of Naibu Kanda*, Toko-shoin, Tokyo, 1927, 3-33.
- 8) 「神田乃武の英語教育」松村幹男 中国地区英語教育学会研究紀要 No. 9 1979 年 73 頁

- 9) 『文化愛媛』No. 75「徳富蘆花」菅紀子 愛媛県文化振興財団 2016 年
- 10) 今治教会第 3 代牧師露無文治自筆 安息日学校参加者名簿 男組, 女組
『日本少年』重見周吉の世界展 展示・出品目録 (2017 年 11 月 1 日～11 月 20 日, 於坂
の上の雲ミュージアム) 菅紀子 松山大学論集第 30 巻第 1 号 2018 年 375 頁
- 11) たとえば熊本バンドから同志社英学校に進みイエール大学に留学した人物として浮田和
民 (1860～1946) (早稲田大学高等師範部長) がいる。
- 12) 「漱石のライバル重見周吉－イエール大学ほか新資料から見える人物像－」菅紀子 松
山大学論集第 30 巻第 1 号 2018 年 346-348 頁
- 13) 学習院アーカイブズにて 2017 年再確認。なお, 2001 年に確認した資料はモノクロコピ
ーで気が付かなかったが今回肉眼で確認し直した資料では末尾の署名の下に朱肉による押
印を認めた。
- 14) 学習院アーカイブズにて 2017 年再確認
- 15) 「漱石のライバル重見周吉－イエール大学ほか新資料から見える人物像－」菅紀子 松
山大学論集第 30 巻第 1 号 2018 年 363-364 頁
- 16) 『「日本少年」重見周吉の世界』菅紀子 創風社出版 2003 年 37-38 頁
- 17) 「神田乃武」小沢明子 昭和女子大学『近代文学研究叢書』第 23 巻 昭和 40 年 17-70
頁
- 18) 「神田乃武の英語教育」松村幹男 中国地区英語教育学会研究紀要 No. 9 1979 年 73-
74 頁
- 19) 「清水彦五郎」『夏目漱石周辺人物事典』原武哲, 石田忠彦, 海老井英次 笠間書院 2014
年 40 頁
- 20) 『「日本少年」重見周吉の世界』創風社出版 2003 年 168 頁
- 21) 「立花銑三郎」『夏目漱石周辺人物事典』原武哲, 石田忠彦, 海老井英次 笠間書院 2014
年 88 頁
- 22) 「岡倉由三郎」『夏目漱石周辺人物事典』原武哲, 石田忠彦, 海老井英次 笠間書院 2014
年 262 頁
- 23) 2001 年 8 月 8 日北海道新聞夕刊 恒松郁生
- 24) かつてこの萬翠荘の裏の城山斜面に漱石の下宿「愚陀佛庵」を再現したものが建てられ
ていたが土砂崩れで全壊した。その後再建場所を巡って意見が対立し保留中である。

<http://www.bansuisou.org/about/>

<http://www.haiku-matsuyama.jp/joka/119/>

Soseki Natsume and two authors of *The Sun*

Noriko Kan

Soseki Natsume revealed the failure of his first attempt at getting a position at Gakushuin in his writing *My Individualism*, which is based on his original lecture to the Gakushuin alumni association. He said he failed despite the fact that he had several supporters who were already working at the school. Shukichi Shigemi, M. D., who is from Imabari, Ehime, and who studied at Doshisha English School and later at Yale University, got the position instead. But the reason that Natsume was rejected and Shigemi was accepted has remained unclear. Natsume even said he did not remember the name of his jobhunting rival. It is doubtful, though, that he really forgot the name.

The author has conducted research on Shigemi and integrated the findings in presentations given at exhibitions in 2017 and in 2018. During that process of preparing for those exhibitions, a new fact was discovered: Shigemi's English language article in *The Sun*. It was also found that an article by Naibu Kanda appeared next to Shigemi's.

First, this paper focuses on an English edition of the magazine, *The Sun*. Second, after reviewing Shigemi's brief history, the life history of Kanda and the situation of English study in Japan at that time in the Meiji era, the relationship between Shigemi and Kanda is examined. Third, the relationship between Kanda and Natsume is examined, as is Natsume's relationship with others around him. Lastly, the study turns around back to Natsume and Shigemi. And the relationship among these three and the direction of the three people's later lives are considered.